

インド・チベットにおける瑜伽行中観派の刹那論についての伝承

古 角 武 睦

〔抄 録〕

インドにおいて、カマラシーラは刹那が部分を有することになってしまう、という説を唱え、それを継承する論師にチベットでは、カダム派のチャパ・チューキセンゲがいる。また、ゲルク派においても、中観自立派についての解説においてこの考えを述べている。本稿ではカマラシーラ、チャパ、ツォンカパ、ケートゥブジェのその問題に関する言及部分についての翻訳を示すとともに、彼らの議論について考察するものである。合わせて、中観帰謬派との関わりについても今後の課題として問題提起したい。

キーワード 刹那、カマラシーラ、チャパ・チューキセンゲ、ゲルク派

1. 問題の提起

ツォンカパ (tsong kha pa blo bzang grags pa 1357~1419) はその著『菩提道次第小論』*lam rim chung ba* 「勝観の章」*lhag mthong* (以下『観小論』*lhag mthong chung ba* と略) において、次のように述べている⁽¹⁾。

de ltar bdag gnyis su 'dzin pa'i ma rig pa sngar bshad pa de yang / phyi nang gi grub mtha' smra ba rnams kyi 'dod pa thun mong ma yin pas btags pa'i gang zag rtag gcig rang dbang can dang / gzung ba phyi rol gyi don shar la sogs pa'i phyogs kyi cha med kyi rdul phra rab dang / de bsags pa'i rags pa dang / 'dzin pa nang shes rig snga phyi la sogs pa'i dus kyi cha med pa'i shes pa skad cig cha med dang / de 'thud pa'i shes pa'i rgyun dang / de 'dra ba'i gzung 'dzin gyis stong pa'i gnyis med kyi rang rig bden par 'dod pa'i kun brtags kyi gang zag dang chos kyi bdag 'dzin min gyi/ . . .

そのように、前述された二我として捉える無明、それもまた、外(教・)内(教、すなわち仏教)の学説論者達の特別な主張によって仮設された常住、一、自在なるブドガラと、および、所取として、外境の対象である東などの方分〔空間の部分〕が無い極微と、それが集められた粗大なるもの、また能取として、内なる認識である前後などの時分〔時間の

部分] がないものである、刹那の部分がない知と、それが延長された知の相続、および、そのような所取・能取として空であるという無二なる自己認識が諦であると主張する遍計の人・法我執ではなくて、・・・

この一節は、ツォンカパが人我執・法我執の二我執について、外教が肯定し、仏教諸派が否定する実体としてのアートマン、および外教（ニヤーヤ・ヴァイシェシカなど）と仏教の説一切有部や経量部などが肯定するが、他の仏教諸派は否定する実体としての極微・刹那、また、有部・経量部も含めて仏教諸派が否定する実体としての（極微・刹那の）集合体、また、仏教の唯識派が肯定する所取・能取を離れた自己認識などは、中観帰謬派の否定する人我・法我ではないことを説明しているものであるが、注目すべきは二つの下線部である。すなわち、ツォンカパは外教と（おそらく）中観派以外の仏教では極微と刹那は部分を持たないと考えていると主張していると思われるのである。このうち、極微が部分を持つかどうかという問題については、仏教を含めインド哲学諸派で議論されてきたことであると思われるが、刹那が部分を持つかどうかという問題は、インド仏教・インド哲学諸派においてはみられないチベット独自の考察ではないか、とも思われていた⁽²⁾。

しかし、刹那が部分を持つという考えは、カマラシーラ（Kamalaśīla c. 740～797）の『修習次第』*Bhāvanākrama*「前篇」において、既にみられているのである⁽³⁾。

根本裕史氏の論文⁽⁴⁾では、ゲルク派における〈刹那の単一性が否定されていること〉・〈刹那が部分を持つこと〉に関する論述については、ギェルツァブジェ・タルマリンチェン（rgyal tshab rje dar ma rin chen 1364～1432）の *snying po'i don gsal* について略述されているのみであるが、この〈刹那の単一性が否定されていること〉についての記述は、ツォンカパの『善説心髓』*legs bshad snying po*⁽⁵⁾や、同書に対するケートゥブジェ・ゲレクペルサンポ（mkhas grub rje dge legs dpal bzang po 1385～1483）の註釈書である『千葉大論』*stong thun chen mo*（『幸いなる者の開眼』*skal bzang mig 'byed*）⁽⁶⁾にもみられる。

そこで以下では、*Bhāvanākrama*「前篇」において、刹那が部分を持つことを論じている箇所の前後を含めた記述、および、ツォンカパ、ケートゥブジェ師弟の前掲書の記述、並びに根本氏の前掲論文でも言及されているチャパ・チューキセンゲ（phyapa chos kyi seng ge 1109～1169）の『東方三中観の千葉』*dbu ma shar gsum gyi stong thun*⁽⁷⁾の記述、という順で、彼らの原典からの翻訳を示しながら、インド・チベットにおける〈刹那の単一性が否定されていること〉・〈刹那が部分を持つこと〉という考えについて跡付けてみたい。

2. *Bhāvanākrama*「前篇」の〈刹那の部分〉に関する記述⁽⁸⁾

nāpy anityāt / tatrātītānāgatayor avastutvān na tāvat tato janma yuktam / ahetukatva-prasaṅgāt / nāpi vartamānāt / samānāsamānakālayos tata utpādāyogāt / tathā hi na

tāvat samānakālaṃ, kāraṇasvabhāva[va]t kāryasyāpi tatsamānakālabhāvitayā niṣpan-
natvāt / nāpi bhinnakālam / kālāntaravyavadhānenotpāde 'titāder evotpatti-prasaṅgāt /
avyavavadhānenāpy utpāde sarvātmanā yady avyavadhānaṃ tadaikasminn eva kṣaṇe
sarvakṣaṇānām anupraveśāt kalpasya kṣaṇamātratāprasaṅgaḥ / yathā paramāṇoḥ sar-
vātmanā saṃyoge piṇḍasyāṇumātratāprasaṅgaḥ / athaikadeśena / tadā **kṣaṇasya**
sāvayavatvaprasaṅgaḥ / svato 'pi notpadyante / nirhetukapakṣeṇaivāśya pakṣasya saṃ
grhītatvāt / svātmani ca kāritravirodhāt / nāpy ubhayataḥ / ubhayapakṣabhāvidoṣ-
advayaprasaṅgāt / tasmāt paramārthato 'nutpannā evāmi bhāvāḥ / saṃvṛtyā tūtpādasya
vidyamānatvān, nāgamādivirodhaḥ / tathā coktaṃ bhagavatā / “bhāvā jāyante saṃvṛ-
tyā paramārthe 'svabhāvakāḥ / niḥsvabhāveṣu bhāveṣu bhrāntiḥ sā saṃvṛtir matā”//
iti / iyaṃ ca yuktir bhagavato 'bhipretā śālistambādau / svataḥ parata ubhābhyām
ahetoś ca janmaniṣedhāt /

無常から（生じるの）でもない。／そのことについて、過去と未来は非事物〔非存在〕なので、まず、それら〔過去と未来〕から生ずるということは合理的ではない。（というの、）無因（から生ずること）になってしまうからである。現在から（生じるの）でもない。（というの、）同時と非同時のそれ〔原因〕から生ずることは不可能であるから。／というのは、まず、同時（の原因から生じるの）ではない。原因である自性と同様に、結果もそれ〔原因〕と同時に生じたものとして成立しているからである。／異時〔非同時〕（の原因から生じるの）でもない。（というの、）別の時によって（間が）隔てられて生じるとき、まさに過去などから生じることになってしまうからである。／（間が）隔てられずに生ずるとしても、もし、一切の本質において（間が）隔てられていないならば、そのとき、ちょうど一刹那に一切の刹那が含まれる（ことになる）から、劫〔カルパ〕も（一）刹那だけになってしまうのである。たとえば、極微が一切の本質において結合するとき、物体も（一）微塵だけになってしまうように、である。／もし、一方向において（結合する）なら、そのとき、刹那が部分を有することになってしまう。／自からも生じない。（というの、）ほかならぬ「無因についての主張」に、この自についての主張のことが含まれるからであり、また、自においては作用が背反するからである。／（自と他の）両者からでもない。（というの、自と他の）両者についての主張に関して成立している二つの過失（ともあることに）になってしまうからである。／それゆえ、これら諸事物は勝義としては決して生じないが、世俗として生じることは有るので、聖言〔アーガマ〕などに背反してはいない。／また、以下のように世尊はお説きになった。「諸事物は世俗として生じるが、勝義においては無自性である。／無自性である諸事物に関するかの迷乱は世俗であると主張されている。」／と。／そして、この道理は世尊が意趣〔意図〕なされたものであって、『稲苺経』⁽⁹⁾などに、自・他・両者・無因から生起することが否定されているからである。

3. stong thun chen mo の〈刹那の部分〉に関する記述⁽¹⁰⁾

・・・rang rgyud pa dag dgag bya de 'gog pa'i rigs pa'i gtso bo gang la byed pa'i rigs pa gal che mdo tsam zhig brjod par bya ste/ de yang yab sras mjal ba dang lang kar gshegs pa'i mdo las gsungs pa dang / 'phags pa lhas/ tshigs las sor mo gzhan med de/ zhes sogs gsungs pa la brten nas/ zhi 'tsho yab sras kyis gcig dang du bral gyi rtags la rtshal du bton nas 'chad la/ ・・・dang po ni/ bden pa'i gcig yin na cha med yin dgos pas/ cha med bkag pa nyid kyis bden pa'i gcig khegs la/ cha med 'gog pa la gnyis te/ 'dus byas cha med dgag pa dang / 'dus ma byas kyi cha med dgag pa'o// dang po la 'dus byas gzugs can rnams la phyogs kyis cha med dang / gzugs can ma yin pa rnams la dus kyis cha med dgag par bya ste/ dang po ni med du 'dod pa'i gshibs nas gnas pa'i rdul phran bar med gnyis chos can/ phrad par thal/ yul go sa gnon pa'i gzugs can gyi dngos po tha dad gang zhig bar med pa'i phyir/ 'dod na bdag nyid thams cad kyis prad dam/ phyogs phyogs gcig gis phrad/ dang po ltar na go sa 'dres par thal lo// 'dod na rdul phran ji tsam bsags kyang bongs tshod cher 'gro mi srid pa par thal lo// phyogs gcig gis phrad phyogs gcig gis ma phrad na cha med yin pa nyams so// gnyis pa shes pa sogs la dus cha dgag pa ni/ dngos rgyu dngos 'bras su 'dod pa'i mig shes skad cig dang po dang gnyis pa'i bar du skad cig gzhan gyis chod dam ma chod/ dang po ltar na dngos rgyu dngos 'bras yin pa nyams so// gnyis pa ltar na bdag nyid thams cad kyis thams cad du chod dam/ phyogs gcig gis chod gcig gis ma chod pa dang po ltar na dus 'dres par 'gyur zhing / 'dod na rgyu dus na 'bras bu yod par 'gyur ro// gnyis pa ltar na cha med yin pa nyams so//

・・・(中観) 自立派の方達が、その否定対象を否定する正理の主要なものをどのようになるのかについての、非常に大事な正理の要点のみを語ろう。すなわち、それもまた、『父子相見経』や『入楞伽経』や、アーリヤデーヴァが「(指の) 関節とは別に、指は無い・・・」云々とお説きになったことに依存して、シャーンタラクシタ御父子は〈離一多の証因〉について、強調して説いている。・・・/ 第一は、〈諦である一〉であるなら無部分でなければならないので、部分が無いことが否定されたことそのことによって、〈諦である一〉が斥けられる。また、無部分を否定することに二つ (ある)。すなわち、有為の無部分を否定することと、無為の無部分を否定することとである。/ 第一〔有為の無部分を否定すること〕について、有為の諸々の有色に空間の部分が無いということと、諸々の無色に時間の部分が無いことが否定されるべきことである。すなわち、第一のもの〔有色に空間の部分が無いということ〕は、部分が無いという主張において、接して住〔存在〕する中間が無い二つの微塵を有法〔主題〕として、(その二つが) 出会うことになってしまう。対境の位置を覆う有色なる事物に異なりが無いか

ら。(出会うと) 認めるのなら、一切の本質において出会うのか、一方向において出会うのか。第一の〔一切の本質において出会う〕ようなら、位置が入り混ざっていることになってしまうのである。/(そう) 認めるのなら、どれだけの微塵が集められても、量が大きくなることは有り得ないことになるのである。一方向において出会い、一方向において出会わないのなら、部分がないことは損なわれるのである。/第二として、知などについて時間の部分を否定することとは、(それぞれ) 直接原因であり直接結果であると認める第一刹那の眼識と第二刹那の眼識の間に、他〔第三〕の刹那によって(間が) 隔てられているのか、隔てられていないのか。第一の〔間が隔てられている〕ようなら、直接原因と直接結果であることが損なわれるのである。/ 第二の〔間が隔てられていない〕ようなら、一切の本質において全ての点で、(間が) 隔てられていないのか、一方向において隔てられ一方向において隔てられていないのか。第一の〔一切において間が隔てられていない〕ようなら、時間が入り混ざっていることになるし、(そう) 認めるなら、原因の時に結果として存在することになるのである。/ 第二の〔間が一方向において隔てられ一方向において隔てられていない〕ようなら、無部分であることが損なわれるのである。

4. *legs bshad snying po* の〈刹那の部分〉に関する記述⁽¹¹⁾

ツォンカパは『善説心髓』*legs bshad snying po* 中観自立派瑜伽行中観派の章において、以下のように述べているのであるが、一読して分かる通り、ケートゥブジェの *stong thun chen mo* における上掲の一節は、この部分に対する註釈(の一部)であると思われる。

de lta bu'i dgag bya de 'gog pa'i rigs pa'i gtso bo gang la byed ce na/ lugs 'di'i dgag bya 'gog pa'i rtags ni 'ga' zung ma gtogs pa 'brel zla ma dmigs pa'i rtags la brten nas byed la/ de yang lang kar gshegs pa dang yab sras mjal ba las gsungs pa la brten nas gcig dang du bral gyi rtags nyid kyis sgrub pa ni dbu ma rgyan las bshad de/ dbu ma snang ba las ni...gcig dang du bral yang gsungs la/...pha rol la 'gal 'du ston pa'i mtshams mthar thug pa ni/ rang gzhan sde pas ji 'dra zhig khas blangs pa la yang dus kyi rim pa'am yul gyi cha'am shes pa'i yul gyi rnam pa sogs cha du ma med pa'i cha med mi srid par bstan nas/ cha du ma dang ldan par grub pa na chos gcig cha du ma'i bdag nyid du yod pa tha snyad pa'i don la mi 'gal mod/ don dam par grub pa la ni cha dang cha can gnyis ngo bo tha dad na 'brel med dang ngo bo gcig na cha rnams gcig tu 'gyur ba dang cha can du mar 'gyur ba'i gnod pa bstan nas chos don dam par grub pa 'gog ste/ 'phags pa lhas/ "tshigs las sor mo gzhan med de"// zhes sogs gsungs pa'i rigs pa la rtsal du bton nas 'chad pa'o// dper na gzhan skye 'gog pa la yang rtag mi rtag gnyis su kha tshon bcad nas rtag pa las skye ba bkag mi rtag pa la dus mnyam mi

mnyam gnyis su bcad nas dus mnyam las skye ba bkag mi mnyam pa la zhig ma zhig
gnyis su bcad nas zhig pa las skye ba bkag snga ma ma zhig pa las skye ba la bar du
chod ma chod gnyis su bcad nas chod pa las skye ba bkag ste de rnams 'gog pa cung
sla'o// de nas ma chod pa las skye ba la bdag nyid thams cad kyis ma chod pa dang
phyogs res ma chod pa gnyis su bcad nas snga ma ltar na dus can gnyis 'dres dgos te/
dper na rdul phra rab 'dab chags pa gnyis bdag nyid thams cad kyis bar ma chod na
yul gcig tu 'dres dgos pa ltar ro// phyi ma ltar na **cha dang bcas pas kun rdzob par**
'gyur ro zhes dbu ma snang ba las 'chad de/ gnod pa ston mtshams mthar thug pa ni
cha cha can la gcig tha dad kyi brtag pa byas nas 'gog pa 'di'o//

「そのような否定対象、それを否定する正理の主要なものを、どのようになすのか。」という
なら、この学流〔瑜伽行中観派〕の否定対象を否定する証因とは、二・三のものを除いて、
〈関係項の非認識の証因〉に依存してなすのであって、それもまた、『入楞伽經』や『父子相見
經』にお説きになったことに依存して、まさしく〈離一多の証因〉によって証明することこそ
が『中観莊嚴論』⁽¹²⁾に説かれている。また、『中観光明論』には、・・・〈離一多〉もお説きに
なっている。・・・対論者に背反を示す究竟の限界とは、自部〔仏教〕・他部〔外教〕の者によ
って承認されたどのようなものに対しても、多くの部分を有さない無部分のものたる、時の次
第、あるいは対境の部分、あるいは知における対境の形象などは有り得ない、と示して、多くの
部分を有するものとして成立しているとき、一つの法が多くの部分の本質（を有するもの）
として存在することは、言説の対象としては背反しないが、勝義として成立しているものにつ
いては、部分と全体の二つは体〔本質〕が異なるならば、（その二つは）無関係であるし、体
〔本質〕が一つであるなら、諸部分が一つ（のもの）になり、かつ全体が多くのものになる、
という侵害を示して、法が勝義として成立していることを否定する。また、アーリヤデーヴァ
は、「（指の）関節とは別に指は無い・・・」云々とお説きになった正理について強調して説い
ているのである。/ たとえば、他（によって）生（ずること）を否定すること⁽¹³⁾に関しても、
〈常〉・〈無常〉の二つに決めて、〈常〉より生ずることを否定する。〈無常〉に関して、〈同
時〉・〈同時でない〉の二つに決定して、〈同時〉より生ずることを否定する。〈同時でない〉に
関して、〈滅した〉・〈滅していない〉の二つに決定して〈滅した〉ものより生ずることを否定
する。〈滅していない〉前者から生ずることに関して、〈間を隔てられている〉・〈（間を）隔て
られていない〉の二つに決定して〈（間を）隔てられている〉ものより生じることを否定する。
また、それらを否定することはいささか簡単なのである。/ それから、〈（間を）隔てられてい
ない〉ものより生じることに、一切の本質において〈（間を）隔てられていない〉もの
と、一方向において〈（間を）隔てられていない〉ものの二つに決定して、前者のような、
時を有する二つのものが入り混ざることが必定なのである。すなわち、たとえば無間なる二つ
の極微が一切の本質において〈間を隔てられていない〉ならば、（二つの極微が）一つの対境

として入り混ざることが必定であるようなものである。/後者のようなら、部分を有するので世俗になるのである、と『中観光明論』に説いている。すなわち、侵害を示す究竟の限界とは、部分と全体に関して一異の観察をなして否定すること、このことなのである。

5. 以上のツォンカパとケートゥプジェの議論についての考察

ツォンカパとケートゥプジェは、それぞれ第4節と第3節で引用された部分において、瑜伽行中観派のシャーンタラクシタ、カマラシーラ師弟が、〈離一多〔一多を離れる〕の証因〉によって、否定対象、すなわち勝義有を否定したことを述べている。

その〈離一多の証因〉とは、まず、「もし、勝義において一つのものに多くの部分があるとしたならば、〈多である部分〉と〈一である全体〉とは同一であるか別異であるかのどちらかになる。」とする。それから、部分と全体とが同一であるならば、部分が、全体と同じ〈一〉になってしまうし、かつ、全体が、部分と同じ〈多〉になってしまう、と矛盾を導いて部分と全体が同一であることを否定する。さらに、部分と全体とが別異であるならば、両者が全く関係のないものになってしまうと、ディレンマ〔両刀論法〕に追いこむ論証法である。

ところで、上に示したようなディレンマに追いこまれるのは、あくまでも部分を持つものが勝義有である場合のみであって、言説有であるものの場合、部分を有していても問題はない。それは言説有なるものに関しては、部分と全体が同一と別異の二者択一でなければならない必要がないからである。

第4節の *legs bshad snying po* の引用文においては、点線部で、一つの法が言説において多くの部分を有することが背反しないことが、また、波線部では、一方向において〈(間を)隔てられていない〉ならば、刹那が部分を有して世俗になってしまうことが説かれている。

第3節の *stong thun chen mo* の引用文の波線部はこの第4節の引用文の波線部の直接の註釈であると思われ、さらに後者は第2節で引用した *Bhāvanākrama* 「前篇」の記述のパラフレーズといってもよいものである。

ツォンカパ自身は *legs bshad snying po* の引用文の波線部について、出典として『中観光明論』 *dbu ma snang ba* をあげてはいるが、分量的にも、また太字の部分の記述の存在の対応からも *Bhāvanākrama* 「前篇」とよく合致している。

点線部分の記述から判断すると、*Bhāvanākrama* 「前篇」においてカマラシーラは、勝義における生起は全面否定していても、世俗における生起は肯定している。このことは *legs bshad snying po* の引用文の点線部の、一つの法が言説において多くの部分を有することは背反しない、という主張とも通じ合うものがあるし、また、前者の引用文の太字部分「刹那が部分を有することになってしまう」と後者の引用文の太字部分「部分を有するので世俗になるのである」ことをも考え合わせれば、ツォンカパは、「刹那が部分を有することになってしまう

ば、世俗の生起になってしまい、よってこれを論拠として勝義の生起は否定されることになる。」とカマラシーラが考えていたと、主張していると思われるのである。

ところで、ケートアップジェの解説を読むと、〈刹那が部分を持つこと〉は〈極微が部分を持つこと〉と並行的に論じられている⁽¹⁴⁾。すなわち、極微が勝義有であるならば、本節で既に述べたディレンマを避けるためには勝義有たる極微は無部分でなければならない。しかし、極微がもし無部分ならば、極微どうしが接するとき、無部分たる二つの極微が重なりあってしまう、大きさが無になってしまう。つまり、極微の集合体たる有色の大きさが無になってしまうことになるのである。同様に勝義有である刹那についてももし無部分であるなら、刹那どうしが接するとき二つの刹那が重なりあって、知〔無色〕の大きさ（ただし時間的な）が無になってしまう、と論じるのである。ということは、現実には有色も無色も大きさが無でない以上、極微も刹那も無部分ではなく部分を有するものとなり、両者が勝義有ならば上述のジレンマに追いこまれてしまうから、極微と刹那は言説有とならざるをえないのである⁽¹⁵⁾。

要するに、ツォンカパおよびケートアップジェの波線部の記述は、刹那は勝義としては成立せず、言説のみの存在たることを論じているものなのであって、全体として、引用部分において彼らは、〈刹那が部分を持つこと〉を、刹那が勝義有であることを否定するための証因として用いており、その源泉はカマラシーラ（の *Bhāvanākrama* 「前篇」）にあると思われるのである⁽¹⁶⁾。

6. *dbu ma shar gsum gyi stong thun*⁽¹⁷⁾の〈刹那の部分〉に関する記述

一方、チャパ・チューキセンゲは『東方三中観の千葉』 *dbu ma shar gsum gyi stong thun* の中で次のように述べている。

gsum pa phyogs chos rjes dpag gis nes pa'i tshul ni slob dpon dbyig gnyen la sogs pas drug gis cig bar sbyar ba na // phra rab rdul cha drug du 'gyur // drug po dag ni go gcig na // gong bu rdul phran tsam du 'gyur / zhes dbus kyi rdul phyogs du ma dang 'brel pa la phyogs du ma'i rdul gyis reg pa la reg pa'i gnas tha dad myed na phyogs drug yang yul tha dad myed par 'gyur la / de 'dod na'ang phyogs rgyas pa'i rags pa myed par 'gyur ro zhes khyab byed mi dmigs pa'i thal ba brgyud pas phyogs rgyas pa yod pas phyogs drug gi rdul yul so so yin zhes pa dang / reg pa po yul so so bas reg pas dbus ma la'ang cha so so yod ces rang bzhin gyi rtags brgyud pa'i rang rgyud 'phangs pas cha dang bcas par grub la / cha dang bcas pas yang dag pa'i gcig ma yin zhes pa 'gal bas khyab pa dmigs pas gcig 'gog pa dang / gcig myed pas du ma myed ces khyab byed mi dmigs pas du ma 'gog pa la sogs pa gsungs mod kyi / des phyi rol gyi don dang der snang ba kho nag cig dang du ma dang bral bas 'gog pas shes bya

snang gi tshul bsgrub par nus kyi / rang rig pa'i sems dgag par mi nus pas don dang
shes pa ma phye bar dus kyi cha las gcig dang du ma dang bral bar bsgrub par
bya'o // de'ang dngos po tsam po'i spyi la skad cig mas khyab pa 'grub pa'i phyir
ram / dngos po dang por skyes pa dus gnyis par 'gag pa ma yin na dang po'i dus su
skyes pa dus gnyis par mi 'gag pas rang bzhin cig dus du ma dang 'brel par 'gyur dgos
na / dus du ma nig cig gi rang bzhin dang ma 'brel de 'gal ba'i chos dang ldan pas
khyab pa'i phyir sngon po dang sngon po ma yin pa bzhin zhes pa hkyab byed 'gal ba
dmigs pas rang bzhin gcig dus du ma dang 'brel ba khegs so // 'gal ba'i chos dang ldan
par yang myong bas grub ste snga ma yin par myong ba na phyi ma yin pa khegs pa
dang / phyi ma yin par myong bas grub pa na snga ma yin pa khegs pa'i phyir ro //
'gal ba'i chos dang ldan pa la ngo bo gcig ma yin pas khyab pa'ang sngon po dang sngo
ma yin la brten te myong bas grub pa kho na'o // des dus gnyis par mi 'gag pa'i dngos
por shes bya la srid pa khegs pa na dngos po la dus gnyis par 'gag pa'i skad cig mas
khyab pa yin no // thug myed du bsgrub pa la gsum ste rtags dgos pa dang / phyogs
chos bsgrub pa dang / khyab pa bsgrub pa'o // dang po ni skad cig ma la'ang thog ma
dang dbus dang tha ma'i cha gsum yod pas khyab ste / snga phyi gnyis kyi bar na gnas
pas khyab pa'i phyir nyin mo'i dus bzhin no zhes pa rang bzhin gyi gtan tshigs so //
phyogs chos kyang skad cig tsam la res 'ga' ba khyab byed du yod pas rgyu ldan khyab
byed du yod de bum pa bzhin zhes pa'i rang bzhin gyi rtags kyis rgyu snga ma sngon
du song par grub la / zhig nas myed pa'i phyis 'byung pas dus phyi ma dang 'brel par
grub ste dus snga phyi gnyis kyi dbus na gnas par grub pa yin no //

yang snga na myed pa'i dus sngon du ma song na skye bar mi rung la zhig nas myed
pa phyis 'byung ma yin na 'gag par mi rung bas na sna phyi gnyis kyi bar na gnas par
grub pa yin no // yang 'das pa 'gags pas dngos po ma yin la / ma 'ongs pa ma skyes
pas dngos po ma yin pas dngos po la rang nyid yod pa'i dus ltar yin pas khyab la / 'das
pa dang ma 'ongs pa'i bar na mi gnas na / da ltar 'gal bas kyang snga phyi gnyis kyi
bar na gnas pa'i phyogs chos grub po // snga phyi gnyis kyi bar na gnas pa la cha
gsum yod pas khyab par yang myong bas grub ste / nyin mo'i dus mtshan mo snga ma'i
tho ras sngon du song la mtshan mo phyi ma'i srod kyi dus phyis 'byung pas snga phyi'i
bar na gnas pa dang snga ma'i tho ras dang 'brel pa snga gro dang phyi ma'i srod dang
'brel pa phyi gro dang bar na gung gi thun gsum yod par mthong pas snga phyi'i bar na
gnas pa dang cha gsum yod pa rang bzhin bdag gcig par mthong ba'i phyir ro // de ltar
cha gsum yod pas khyab pas don dam pa'i gcig myed ces pas khyab byed 'gal ba dmigs
pa'o // de ltar cha myed tsam rjes dpag des khegs pa na cha myed zla bcas shugs la

khegs pas du ma khegs pa'am / rmongs pa la gcig myed pa'i phyir du ma myed ces
khyab byed mi dmigs pas 'gegs pa'i skabs kyang yod do // de ltar snga phyi'i bar na
gnas pa la cha gsum yod pas khyab pa na skad cig ma snga phyi'i bar na gnas pa'i chos
mi 'dor ba ltar de la char phye ba'i cha des kyang mi 'dor la / yang de la phye ba la
sogs pa cha'i cha rnam kyis kyang khyab bya snga phyi'i bar na gnas pa 'dor mi srid
pas khyab byed cha gsum yod pa'ang 'dor mi srid de khyab byed myed pa'i khyab bya
mi gnas pa'i phyir ro // des na cha thug pa myed pa grub pa yin no //

第三として宗法〔主題における述語〕が比量によって決定される仕方とは、軌範師ヴァスバ
ンドゥなどが、「六つ（のもの）をもって一つ（のもの）に結び付けるとき、『極微は六つの部
分（を持つもの）になる。// 六つのものが位置が一つであるなら、//（極微の）集まりは微
塵だけ（の大きさ）になる。/』

というのは、多くの面と結合している真ん中の塵〔極微〕に、多くの面において塵〔極微〕が
接触しているものに対して、接触している場所が異なることが無いなら、六つの面も対境とし
て異なることが無いことになる。また、『そのことを認めるならばまた、面が広がりを持った
粗大なものは存在しないことになるのである。』という〈能遍の非認識という帰謬論証〉は、
間接的には、『面の広がりには存在するので六つの面における塵〔極微〕は対境として別々であ
る。』ということである。また『「対境として別々である接触しているものが、接触しているの
で、真ん中のものについても（別々のものが接触している）別々の部分が存在している。」と
いう間接的な同一性の証因の自立論証が投じら〔還元さ〕⁽¹⁸⁾れているので、（極微は）部分を
有するものとして成立しているし、部分を有するものであるから実義の一ではない。』という
のは、背反〔一ではないこと〕による所遍〔部分を有するもの〕が認識されることによって、
一を否定しているのである。また、『一が存在しないので多は存在しない。』というのは、能遍
が認識されないことによって、多を否定しているのである。」云々とお説きになっているが、
それ⁽¹⁹⁾によって、外境の対象やそれ〔外境の対象〕として顕現しているだけのもの〔所取〕
を、〈一多を離れているもの〉として否定しているのであるから、所知が顕現する仕方を証明
することはできる。しかし、自己認識の心を否定することはできないので、（外境の）対象と
知を区別せずに、〈時間の部分〉（という点）から〈一多を離れたもの〉として証明すべきであ
る。/ それもまた、単なる事物の一般概念については、刹那によって遍充されている。という
のは〈侵害を有する〉という比量によって、単なる事物が常において斥けられているとき、刹
那による遍充が成立しているからである。すなわち、第一（の時）に生じた事物が第二の時に
滅するのでないならば、第一の時に生じたものが第二の時に滅さないで、一つの自性が多く
の時と結合していなければならない（。そうである）ときに、「多くの時というものは、一つ
の自性と結合しているものではない。というのも、（一つの自性は）〈背反する法を有するもの
〔一刹那〕〉によって遍充されているから。〈青〉と〈青ではないもの〉の（背反している）よ

うに（一つの自性と多くの時は背反している）。』というのは、背反する能遍〔一つの自性を遍充している〈背反する法を有するもの〉、すなわち一刹那〕が認識されることによって、一つの自性が多くの時と結合することが斥けられている、ということなのである。/ 〈背反する法を有するもの〔一刹那〕〉に関しても、知覚によって成立している。というのも、（時間的に）前のものについて知覚するときは、（時間的に）後のものが斥けられているし、また、（時間的に）後のものについて、知覚によって成立しているとき、（時間的に）前のものは斥けられているからである。〈背反する法を有するもの〔一刹那〕〉について、体〔本質〕が一つではないものによって遍充されているものも、〈青〉と〈青ではないもの〉に依存して知覚することによって成立しているだけなのである。そのことによって、第二の時に減さない事物については所知として有り得ることが斥けられているとき、事物については、第二の時には減している刹那によって遍充されているのである。/ （部分への分割が）無限遡及 anavasthā するものとして証明することに三つ（ある）。すなわち、証因を配置することと、宗法〔主題の有する性質〕を証明することと、遍充を証明することである。/ 第一〔証因を配置すること〕とは、「刹那についても、初めと中間と終わりの三部分の存在によって遍充されている。というのも、（刹那については）前後二つの間に住〔存在〕することによって遍充されているから。昼間の時の（朝と夜の二つの間に住〔存在〕する）ように。」というのは、同一性の証因である。/ 「宗法〔主題の有する性質〕も、ちょうど（一）刹那において、或る場合には能遍として存在するので、（宗法である）原因を有するものは、（刹那の）能遍として存在する。すなわち瓶のように。」という同一性の証因によって、（時間的に）前の原因が先行するものとして成立しているものに関しては、消滅して無であることが後行することによって（時間的に）後の時と結びつくものとして成立し、前後二つの時の間に住〔存在〕するものとして成立しているものなのである。/ また、前に無である時が先行しないならば、生ずることができないし、滅して無であるということが後行していないならば、滅することができないので、前後二つの間に住〔存在〕するものとして成立しているのである。/ また、過去は滅しているので事物ではないし、未来は生じていないので事物ではないから、事物に関しては、〈(事物) それ自身が存在する時は、現在である〉ということによって遍充されているし、過去と未来の間に住〔存在〕していないならば、現在が背反しているということによっても、前後二つの間に住〔存在〕する宗法が成立しているのである。/ 前後二つの間に住〔存在〕するものについて、〈三つの部分の存在〉ということによって遍充されていることに関しても、知覚によって成立している。というのも、昼間の時は、夜が（その）前にある黎明が先行し、夜が（その）後にある黄昏の時が後行するので、前後の間に住〔存在〕する。また、（そのことは、）前者の黎明と結合しているものが先行し、後者の黄昏と結合しているものが後行し、かつ（その二つの）間に真ん中の部分（がある）、と〈三つの部分が存在すること〉であると理解されることによって、〈前後の間に住〔存在〕すること〉と、〈三つの部分が存在すること〉とは、本質が同体であると理解され

るからである。/ そのように、「〈三つの部分の存在〉によって遍充されているので、勝義である〈一〉は無である。」ということによって、遍充（である〈三つの部分の存在〉）が（勝義である〈一〉と）背反することが認識されるのである。/ そのように、単なる無部分がその比量によって斥けられているとき、無部分が対を有する〔複数である〕ことが間接的に斥けられていることによって、〈多〉（なる無部分）も斥けられている。すなわち、「無知なる者には〈一〉が存在しないので〈多〉も存在しない。」というのは、「能遍（である〈一〉の存在）が認識されないことによって、（所遍である〈多〉の存在が）否定される場合も存在する。」ということである。/ そのように〈前後の間に住〔存在〕するもの〉について、〈三つの部分の存在〉によって遍充されているとき、前後の間に住〔存在〕する刹那という法を拒斥してはいないように、それ〔〈前後の間に存在するもの〉〕について（も）（さらに三つの）部分に分けられているという、その（三つの）部分としても、拒斥していない。また、それ〔前後の間に存在するもの〕について、部分の諸部分によって遍充されてもいる〔部分の諸部分の所遍でもある〕〈分けられているもの（である〈前後の間に存在するもの〉の部分）〉などが、（さらに）前後の間に住することを拒斥することは有り得ないので、能遍〔部分の諸部分〕が（さらに）三つの部分を有することを否定することも有り得ない。というのも、能遍の無い所遍は住さ〔存在し〕ないからである。それゆえに、部分は、（部分への分割が）無限遡及するものとして成立しているのである。

1. チャパの議論についての考察

以上の第6節の論述においてチャパは、明確にというよりも、積極的に〈刹那が部分を持つこと〉を主張している。

この引用部分においては、カマラシーラへの言及は直接みられないのであるが、チャパの *dbu ma shar gsum gyi stong thun* については、その二諦説の展開に対するカマラシーラの影響が既に指摘されている⁽²⁰⁾し、また、*dbu ma shar gsum gyi stong thun* の *shar gsum*（東方三中観）とは、シャーンタラクシタ・カマラシーラ師弟とシャーンタラクシタの師であると言われるジュニャーナガルバのことである⁽²¹⁾。

また、上掲のケートゥブジェからの引用文とチャパの論述とを比較するならば、同じく〈刹那が部分を持つこと〉を〈極微が部分を持つこと〉との並行関係から論じている⁽²²⁾のであるが、カマラシーラは、*Prajñāpāramitāvajracchedikāṭikā* その他において因果同時説を批判する際、刹那について極微との並行関係のもとに論じている。

このように考えてくれば、チャパの〈刹那が部分を持つこと〉についての主張は、おそらくカマラシーラに由来すると思われるし、チャパの二諦説のツォンカパの二諦説への影響関係の指摘を考慮する⁽²³⁾と、ツォンカパははじめゲルク派が、〈刹那が部分を持つこと〉について、カ

マラシーラよりは（チャパほどではないにしろ）積極的に主張しているのも、チャパの影響によるものかとも考えられるのである。

ところでチャパは、時間の観点から〈離一多〉を論証しなければならないことの理由として、下線部にみられる通り、空間の観点からの〈離一多〉の論証は、有色には適用できても自己認識には適用できないのに対し、時間の観点からの〈離一多〉の論証は、外境（の有色）と知の両方に適用できることをあげている⁽²⁴⁾。

すなわち、外境も知も有為法である限りは、必然的に時間に伴われざるをえないものであり、その時間の構成要素である刹那について吟味することによって、外境と知の両方について、同じ論拠で検討できるとするのである⁽²⁵⁾。

また、チャパは引用された文章の最後の段落で、部分もさらにその部分に分けられ、部分への分割は無限遡及 *thug myed* であると主張しているが、このことは無限に分割が可能であるということよりも、むしろ、事物には部分を持たない構成要素が存在しないということに比重が置かれており、要するにどんな小さなものでも、存在するからには部分を有するということが⁽²⁶⁾だと思われる⁽²⁷⁾。

8. 帰謬派との関わり

以上述べてきた〈刹那が部分を持つこと〉という考えは、ツォンカパ、ケートゥブジェにとってはあくまでも、中観自立派の学説の解説においてあらわれるだけであり、彼らゲルク派自身が信奉する中観帰謬派の学説の解説部分には説かれていないのである。

帰謬派にとっては刹那が部分を有するかどうかというある意味自然哲学的な問題よりも、煩惱を減するための問題などの方が重要だった⁽²⁸⁾のであろうし、また世俗においても一切は無自性であることを主張する帰謬派にとっては、刹那が部分を持つという主張を積極的に打ち出すことは、はばかれたのでもあろう。

ただ、ツォンカパの叙述の端々には刹那が部分を持つことを前提としているかのような論述が見られる⁽²⁹⁾。

帰謬派のチャンドラキールティと自立派のシャーンタラクシタ・カマラシーラには、同じ中観派といっても、様々な点での違いがあっても、自己認識などに対する批判を含めて、論証方法ではともかく主張の点では多くの共通点がみられる。生起の否定に関して、彼らは同じく因果同時をも批判しており⁽³⁰⁾、また、〈刹那が部分を持つこと〉という考えと直接かかわっている〈離一多〉の論法と同様なものは、チャンドラキールティの人無我の論証における〈車の比喻による七辺の否定〉⁽³¹⁾にもみられる以上、ゲルク派自体の立場として、刹那に部分が有ることを暗黙の前提にしていたとしてもおかしくはないと思われるのである。

〔注〕

- (1) K. 169a6～a2. ツルティム、高田 [1996]、16～17ページ参照。
- (2) 根本 [2008]、3～15ページ注 (14) 「・・・現時点で確言はできないが、*Tshad ma yid kyi mun sel* や *Shes rab 'od zer* に展開される以下の議論はチャパが初めて導入した可能性があると言えるだろう。」この論文において、根本氏は、チベット中観思想の時間論において、刹那の分割可能性、すなわち刹那は部分を有するのかどうかという問題に注目され、チャパ・チューキセンゲ (phya pa chos kyi seng ge 1109～1169) よりサキヤ・パンディタ (sa skya paNDita 1182-1251) を経て、ゲルク派に至るその展開を跡付けられている。
- (3) Tucci [1978], p. 201. 後掲注 9 参照。この部分の存在の指摘は森山清徹教授の御教示による。同教授に謹んで感謝申し上げます。
- (4) 前掲注 2 参照。
- (5) 後掲注 11 参照。
- (6) Cf. Cabezón [1992]. ツルティム、藤仲 [2001]、同 [2003] 参照。
- (7) Cf. Tauscher [1999].
なお、この書の最初の部分については、先行研究として森山 [2001a] が、邦訳として同 [2001b]、[2001c]、[2001d] がある。
- (8) Tucci [1978], pp. 201-203.
- (9) カマラシーラの『一切法無自性成就』*Sarvadharmanīḥsvabhāvasiddhi* にも、刹那が部分を有することになってしまうことが述べられている。森山 [1982] 130ページ参照。また、*Bhāvanākrama* 「前篇」の引用文のパラフレーズもみられる。同131ページ注 (42) 参照。また、カマラシーラは『般若波羅蜜多金剛能断註』*Prajñāpāramitāvajracchedikāṭikā* においても、『稻芊経』*Śālistambasūtra* を引用して〈他不生〉を論証しているが、その中にも、同様の主張がみられる。森山 [1994]、372ページ参照。
- (10) H. 75a1～2, 75b4～76a3. ツルティム、藤仲 [2001]、168～169ページ参照。
- (11) H. 62a4～a6, 62b1～63a1. 御牧、森山、苦米地 [1996]、64～67ページ参照。片野、ツルティム [1998]、76～79ページ参照。
- (12) 一郷 [1985] 参照。
- (13) カマラシーラの他生否定については、森山 [1995]、同 [1996] 参照。
シャーンタラクシタ師弟の〈離一多性論証〉の起源については、森山 [2008a]、[2008b]、[2008c] 参照。
- (14) 後述第 6 節の *dbu ma shar gsum gyi stong thun* の記述、および第 7 節の考察を参照。
- (15) なお、ケートゥブジェの論述で注目されることは、波線部の直後以下の記述 (H. 76a3～77b2) で、〈無部分であることの否定〉を無為法たる虚空と法性〔空性〕にも適用していることである。そして、法性が（おそらくは虚空も）言説有たるのみであることを結論としている。ツルティム、藤仲 [2001]、168～171ページ参照。

- (16) ただし〈刹那が部分を持つこと〉は、カマラシーラの場合では単なる帰謬論法の帰結としてしか言及されていないが、ツォンカパ、ケートアップ・ジェと年代が下がるに従って、証明すべきより積極的な結論に（少なくとも表現上は）なっている。
- (17) Ibid. pp. 111～113. なお、根本 [2008] 4ページ以下参照。
- (18) 「投じる〔還元する〕'phen pa」とは、命題の対偶をとって帰謬論証を自立論証に変換すること〔帰謬還元法〕のことである。ここでは具体的には、「接触している場所が異なることが無いなら、接触しているものが対境として異ならないことになる。」という帰謬論証を「対境として異なるものが接触しているので、接触している場所が異なる。」という自立論証に還元するという趣意である。
- (19) 「それ」とは、空間の観点からの〈離一多〉の論証のことである。
- (20) ツォンカパは、その二真理の関係・・・を以下の二方法により導く。1. 論理による方法としてカマラシーラ・・・の『中観光明論』に表明されるアポーハ論に基づいている。・・・2. 聖教による方法としてカマラシーラの『中観光明論』に引用される『解深密経』の見解から二諦は同一でも別でもないとする点を踏まえている。・・・」（森山 [2001a] 81ページ）。
- (21) チャパ自身は、中観派の中でも自立派、特にシャーンタラクシタ・カマラシーラの立場に立っており、チャンドラキールティの帰謬派の主張を否定している。上掲注17参照。
- (22) 森山 [1994]、371ページ参照。
- (23) 森山 [1994] 参照。なお、野村氏もチャパのツォンカパへの影響を指摘しておられる。野村 [2006]、25ページ参照。
- (24) 上掲注16参照。
- (25) ツォンカパには明らかに、空間的・無時間的な集積だけではなく、時間的に継続して連続していることをも、部分の集積とみなす考えがみられる。以下の『観小論』の記述を参照。
 dus gcig pa'i tshogs pa dang / dus snga phyi'i phung po'i rgyun gyi tshogs pa ...
 一時における集積と前後の時における蘊の相続の集積・・・
 (K. 168b3. ツルティム、高田 [1996]、12～13ページ。)
- (26) 根本氏は、チャパは「刹那が無際限 (thug myed) に分割され得るものであること、言い換えれば、刹那が複数の部分から構成されており単数性を欠いたものであることを論証」している、と主張しておられる。根本 [2008]、4ページ参照。
- (27) この *dbu ma shar gsum gyi stong thun* には、上掲引用部分以外にも、「部分に分けて一と多として探求しても得られない。」という考えが散見される。
 ... blo nyid la cha shas phyte ste gcig dang du mar btsal na ma rnyed pas ...
 ... 慧そのものについて、部分に分けて一と多として探求したならば得られないので ...
 (Ibid. p. 9. 森山 [2001c]、60ページ。)
 ... blo des cha shas phyte ste btsal na gcig dang du ma dang don byed pa'ang gtan

ma rnyed pas . . .

. . . (勝義諦は) その (究竟を量る) 慧によって、部分に分けて一と多として探求したならば得られないので . . . (Ibid. p. 13. 同上63ページ。)

- (28) この問題については、森山 [1993] 参照。
- (29) 例えば、第1節の引用文など (上掲注1参照)。
- (30) 前掲注9の森山 [1994]、371、370ページ参照。
- (31) <車の比喩による七辺の否定>とは、車の全体と部分は、1. 異なるのではない、2. 同一でもない、3. 全体が部分を有しているのでもない、4. 全体が部分を依り所としているのでもない、5. 部分が全体を依り所としているのでもない、6. 全体は部分の単なる集まりではない、7. 全体は部分の形ではない、と分析して車の実体性を否定することを、我と蘊の関係の比喩につかって、無我を論証する論法である。チャンドラキールティ (Candrakīrti c. 600~650) 『入中論』 *Madhyamakāvatāra* 「第六現前地」、ツォンカパ 『意趣善明』 *dgongs pa rab gsal* (P. 219b)、小川 [1988]、533ページ参照。

〔参考文献〕

- 一郷正道 [1985] 『中観莊嚴論の研究：シャーンタラクシタの思想』 文栄堂、昭和60年
- 小川一乗 [1988] 『空性思想の研究Ⅱ—ツォンカパ造『意趣善明』第六章のテキストと和訳—』 文栄堂、昭和63年
- 片野道雄、ツルティム・ケサン [1998] 『ツォンカパ中観哲学の研究Ⅱ』 文栄堂、平成10年
- ツルティム・ケサン、高田順仁 [1996] 『ツォンカパ中観哲学の研究Ⅰ』 文栄堂、平成8年
- ツルティム・ケサン、藤仲孝司 [2001] 『ツォンカパ中観哲学の研究Ⅲ』 文栄堂、2001年
- [2003] 『ツォンカパ中観哲学の研究Ⅳ』 文栄堂、2003年
- 根本裕史 [2008] 「チベット中観思想における時間論の展開 「刹那」の概念を中心に」 日本西藏学会会報54巻、3—15ページ、2008年
- 野村正次郎 [2006] 「ツォンカパの空思想における当事者性」 日本西藏学会会報 52巻、13—27ページ、2006年
- 御牧克己、森山清徹、苦米地等流訳 [1996] 『大乘仏典中国・日本篇 第15巻ツォンカパ』 中央公論社、1996年
- 森山清徹 [1982] 「カマラシーラの *Sarvadharmāṇiṣvabhāvasiddhi* の和訳研究 (2)」 佛教大学大学院研究紀要第10号、昭和57年、109—158ページ。
- [1993] 「ツォンカパの無我、無明論—スヴァータントリカおよび瑜伽行中観派批判—」 佛教論叢第三十八号平成五年度浄土宗総合学術大会研究紀要、浄土宗教学院、平成五年、総合学術大会発表要旨1—29ページ
- [1994] 「中観派と経量部の因果論論争—竿秤の上下 (*tulāḍaṇḍanāmonnāma*) の喩例を巡って—」 印度學佛教學研究第43巻第1号、374—369ページ、平成6年12月

- [1995] 「Kamalaśīla による〈他不生〉の論証方法と経量部の因果論：因果同時、異時説の論破」文学部論集 79巻41—58ページ、佛教大学、1995年
- [1996] 「カマラシーラの他不生の論証とダルマキールティの刹那滅論：ヤショミトラとウディオータカラとの論争の経緯」印度學佛教學研究45巻1号346—340ページ、日本印度学仏教学会、1996年
- [2001a] 「チベット仏教、チャパチョキセンゲ及びゲルク派 (dGe lugs pa) の二諦説の解釈」特定領域研究「古典学の再構築」総括班編、「古典学の再構築」第I期研究成果報告〔文部科学省研究費補助金特定領域研究 (A) 研究成果報告書118、平成13年〕、78—85ページ
- [2001b] 「チャパチョキセンゲの二諦説—dBu-ma śar gsum gyi stoñ thun 和訳研究 (1) —」『香川孝雄先生古稀記念論文集 仏教学浄土学研究』永田文昌堂、2001年、185—201ページ
- [2001c] 「チベット仏教、チャパチョキセンゲ及びゲルク派 (dGe lugs pa) の二諦説の解釈：チャパチョキセンゲの二諦説—dBu-ma śar gsum gyi stoñ thun 和訳研究 (2)」特定領域研究「古典学の再構築」総括班編、「古典学の再構築」第I期公募研究論文集〔文部科学省研究費補助金特定領域研究 (A) 研究成果報告書118、平成13年〕、57—59ページ。
- [2003] 「チベット仏教、チャパチョキセンゲ及びゲルク派 (dGe lugs pa) の二諦説の解釈：チャパチョキセンゲの二諦説—dBu-ma śar gsum gyi stoñ thun 和訳研究 (3)」池田知久編集、論集「原典」〔文部科学省研究費補助金特定領域研究 (A) 研究成果報告書118「古典学の再構築」研究成果報告集 2、平成15年〕、158—170ページ。
- [2008a] 「後期中観思想（離一多性論）の形成と仏教論理学派—デーヴェンドラブッディ、シャーキャブッディのPramāṇavārttika 3 (kk. 200-224) 注の和訳研究」仏教文化研究52巻1—49ページ、浄土宗教学院、2008年
- [2008b] 「後期中観思想（離一多性論）の形成とシャーキャブッディ（上）」文学部論集92巻1—27ページ、佛教大学文学部、2008年
- [2008c] 「後期中観思想（離一多性論）の形成とシャーキャブッディ（下）」印度學佛教學研究56巻2号911—904ページ、日本印度学仏教学会、2008年
- José Ignacio Cabezón (tr.) [1992] *A Dose of Emptiness : An Annotated Translation of the sTong thun chen mo of mKhas grub dGe legs dpal bzang*, State University of New York Press, 1992
- Helmut Tauscher (ed.) [1999] *Phya-pa-chos-kyi-señ-ge dBu-ma śar gsum gyi stoñ thun*, Arbeitskreis für Tibetische und Buddhistische Studien, Universität Wien, 1999
- Giuseppe Tucci (ed.) [1978] *Minor Buddhist Texts* (Serie Oriental Roma; 9), Rinsen, 1978

〔付記〕

() は言葉の補足のため、[] は言葉の言い換えのため、また < > は言葉のまとまりをはっきりさせたり、特定の術語とみなせるものを指示するために用いている。なお、チベット語のローマ字転写は拡張ワイリー式を用いている。また、原文の引用中、下線および第6節以外の太字は全て引用者によるものである。

〔略号表〕

P. 大谷大学図書館蔵『影印北京版西藏大藏経』

H. lha sa edition

K. bkra shis lhun po edition

(こすみ たけちか 文学研究科仏教学専攻博士後期課程)

(指導：森山 清徹 教授)

2009年9月30日受理